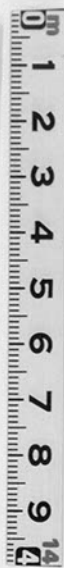


平青年



創刊号

第1卷 第1号



青年平 创刊号

目 次

[illegible][illegible]

000九七五四三三二〇九八七六六四三二一〇九八七六四三二一

節經魚店

平四 電二一三

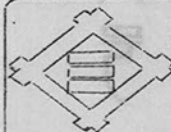


マルトモ文庫部

平市四丁目 電 { 124 } 番
 { 234 }

鈴藤

平市四丁目
電 93 .



同じ品なら必ず安い

御贈春には
百枝の百枝店

三井

平3 電 { 284
248

軽くて強い特許防水式
能澤の自転車

門馬自轉車店

平市六丁目 電話551番

綿とふとん

全
ズズキ製綿店

町川新市平
番二二西詰電

(工場一平市正月町)



宗像洋服店

平市北白銀町

衣料品の店
藤谷屋

平市新川町14

TEL 4 3 7

三 五 九

器用・不器用



村 浩 村

無論でも文章でも、そのほかの芸ごとでも、器用なものは器用なりに、不器用なものは不器用なりに、それぞれの持ち味がでてくるもので、わたたくしは不器用ですから——といつてしりこみする筋のものではないとも、器用な鼻に付けていると、法はかぎものになつてしまふ、こちらかといへば、不器用なものに面白い味を出して深く刻る刻が多いといつてよいのもしぬない。

・剣巧なるもの妙味少し——と横澤庵は言つてゐる。剣巧者は剣巧にまかせて、よいかげんに物ごとを片づけるため、流澤になり、悪徳な者が真剣に物ごとにとりこんで深く刻る剣にとりしきない。悪徳なものに接するときの感じが、剣巧なものに接するときの感じよりも、却つてふかい妙味のあることがある。

世事において、芸のみにあつても、剣巧だからといつて、器用だからといつて、心をゆるめてゐると或い人間に勝るであらうし、悪徳だからとおもひ、不器用だからとおもつて、つとめれば深い人間に大抵するであらう。もともと、悪徳や不器用に妙味があるともいふ。

平青年團の昔語り(1)

顧問 大 森 勇

私は青年團に關聯し始めたのは、今から三十四五年前のことだ、今はまだ平市とやらが平町の境であつた。青年團の昔語りをする前に、當時の平町を回顧して見たい。當時の平町は飯野神谷は兼、このこと半室も併合されてはゐつた。大町だの十五丁だのはなかつたし、南町裏は直ぐ田雨で谷川流注續いて居た。大正元年の秋谷川に飢り嫁入があつた野などは、吾々南町では、幾千の炊火が明滅する餘り、草花光景と二階から眺めたものでつた。文化の程度は今日から思ひ出すつと低級で、映画館は有馬座と平路と二、三ありしかあつた。今の秋芝居のおんちん親戚い人か治善と叔して舞台の薄暗い處で観望したものだ。映画は主に日本物だつたが、たまにはイントランスとかパテ口何々とか拳骨とかの西洋物もあつた。イントランスは入場料二円だつたので、あんまり高料金を取つて行く人があるだらうかと云はれたが、それでも平路は大入場員であつた。十五日會と云ふ社交風林があつた。之は裁判官とか校長とか校長とか校長の旦那様とか、所謂平町に於ける一流の偉い方々が、毎月十五日南町の大和屋(電話十四番)で會食する會合であつた。このころは饅頭(八十個)を食べて一本づける外に何の意味もないナンセンスの會合であつたが、町中の指導的立場にある人々を毎月一回集つては、こゝろに會食すると云ふ事は、町中の親戚とか知合に校立つたのみならず、そこから總體は輿論を醸成されたこと云ふ無形の利益があつた。現在の平町は兎角二枚に別れて資中合せになつて、強み合ふ傾向があるが、青年團の幹部が主権となつて、毎月一回佐市町の各商店の代表者を集めて茶話會でも開いて、死にら知何なものだらう。毎月十三日會と云ふ文化団体もあつた。當時の會中の校長であつた阿谷文平氏(創立されたもので、毎月十三日の夜平路の樓上に集つて會談の交際をしたのだ。櫻井賢夫、岩川新保、木村四郎、松本千次郎、吉田利吉、酒井國三郎、新田目善次郎、松野尾繁雄、大森庫、永瀬忠太郎の諸君が常連であつた。議長はあつたが兎に角二十年近くも継続した文化團體であつた。土曜と云ふのもあつた。之は平町の中心を貫く大興理官頼むのか目的で發足したので、土曜の夜に順着に會談の定に集つて、只ゆる

送とらへて勸誘したもので、十二時前に散會する事は鈴で鶴鳴を聞いて散會した事もしほ／＼である。會員の米田徳二郎と大伴博二君がある夏の夕方お城山の豆腐屋の前で出會した。世間者などである中に談論が如つた。何時間か談論したのである豆腐屋で戸戸を開けた。談論に熱中して大きな聲を出して安眠妨害になつたのだと氣が付いて談論を止めて束の空を眺めたら銀田山から夜が明けた。是に豆腐屋の前で立つた儘一晩談論したのであつた。まるでヤリシヤの神格にでも出る程な騒がしき路平にあつたのだ。それ程當時の青年は慷慨であつた。吉野造博士が民本主義の喇叭を吹かした時だつたので、長夜の夢をもちほつては人様かえろ／＼目と覚め始めた。平にも人力車に乗る共濟會なるものが生れた。自動車もなかつた頃で百人かやの人力車夫が居た。當時の車屋はこの生活で、日の當らないとこやみの寒長屋に住つて、長い着物を持つてゐる者はなかつた。食事は焼くするで生活は荒れて飲まぶつのは當り前だつた。外から第三者もこの處に捲てゐた。いふところへたし、内からも車屋諸君が自前しなけりしはらぬと考へて、税子共濟會が生れたのだ。車屋諸君は月五銭、賛助金は月二十銭獻金して、病氣になつた人や困つた人を共濟したのだ。今の生活保護法と健康保険法とをば、ちやに似た振だ狂態であつた。田口君と云ふ飲んだくれの暴君が手に負へぬ人があつたので、断然禁酒して自衛運動の第一飯に立たれた。税子共濟會も相當に成功を挙げた。相當に経費した。

(未完)

(註) 多岐の所お願して筆を取つて戴きました。云はり平市の青年会と云うもの生字引にも云うべき大先輩の先生の手筆は三月四日の朝刊の下に始終の映さ深くさせる存じます。



所感

食糧約一千七百石を有する我々平市連合青年會
 は實に壯觀と云はぬはなるまい。本年の三月十日
 に新式式事挙げて糧倉に三月間、未だ道の邊を歩
 かつても既に飯田に立つて計畫事業を運営して未
 だ、其の粗算は諸君のよく熟知する處である。激
 いて今又文化部の盛大な事業の一つとして新西さ
 れつゝあつた四月十日興業部の刊行号を注之るに
 當つては正に新しき時代を創造したものと云へよ
 う。將來共に益々其の發展を祈るものである。り
 うりう機關表の使用こそは我々青年會の行動と如
 突に表現する機関で最も發展は突に平市連合青年
 會の發展を意味するものである。故に我等會員は
 單なる傍觀者にあらずして此の事業の完成と維持
 而して又其の糧倉と發展とを期すべく努力すべき
 である。我等は又常に此の興業部を變じ利用して
 大いに我々の自治に助けけぬはなるまい。則ち
 糧倉こそは柄で已を待する上に於て一人に獲する

上に於て、又世の指導者となる上に於て最も肝心な
 要素となるべきものである。會同諸君より、諸君の
 金力は奉けて此の振興院に傾注せよ、さす前は初め
 て大の成程が期待せられるであらう。
 さて血に點はる青年は靜かに平市の當面の事迄は注
 視し、消費地と生産地の協同体である事を認識すべ
 きである。此の協同体を樂林同協として標し平市の
 平和文化の建設に偉大なる任務を負担して居る事を
 自覚せねばなるまい。平市運合青年會の氣風とも云
 へべき地獄に落ちた悲劇たる熱を鼓舞し、能力を充
 満して本機關誌を通じて、規約第三條の目的達成に努
 進すべきである。

創刊号に序して羅達平市の將來を荷負ふ我等青年
の奮起を望む次第である



評議員中根さんを視る

芥生

さんさんどおりとや太陽のもと日一日と色々増す森の中も草花より面へ初十五分若より晴れた静寂そのもの下光奇の中に中根さんの影がでんとかまえていた。朝に夕に清い小川江蘇のせいの青き階きから中根さんは育ち現存のこの美しい環境のもとで二に製しんでいる。中根さんは其夫のいる機しい方である。中根さんを知つて日は焼いのであるが十年もの知己の縁なやさしくいふわつてくれるお兄様の静かなやささる。それはひとえに中根さんの温和な優しい性格からにちみ出る故にであらう。評議員中では数年少者であらう。中根さんは知性豊かと思ひせらる大さな眼を弄つてゐる。神谷青年會人ありの中新人常に整齊な態度で青年らしい理想の追求に心を走らすの人となりは所折り合はせる評議員会席上にもその光輝が何れもみえす。一言のものと云へば彼は純潔で機敏なものである。彼はあらゆる會議に出席する。青年會に對してはあく迄も情熱の眼を注いでいると云つても過言ではあるまい。

に幸福な御人である事か。彼に就ては愛慕家である。私は中根さんを知り何ものかを學びたい事か。彼、本當に吾々に耐えたいと共に評議員中根さんを知りやうしてはさまたし事な者だと思ふものがある。大抵中根さんの人となりは説明しなかつた加ひに家では完全な彼を表現したとは云へない。けれども骨だけ知んだつもりである。彼に私は中根さんに希ふ。市運會ひいては職運會の発展の爲めより良き協力者として行動願ひをこめたいことだ。

青年と修養

五十字記

西田政美

青年會の重大な目的である青年の修養は、所謂一般的教育である。健全なる國民、善良なる公民としての修養である。然に我々青年會はある理想、或いはある教養に共鳴した同志の団体と云ふわけでもない一定の範疇に共同生活を営む青年の団体である。その青年であるならば、特殊の例外を除いて何人でも會員である。従つて特殊の事項に關する同志の衆団の如くその特殊の事項に就いてのみの特長が行なはるべきでは

一八

我知る程にも固い信念の持主だから目的の達成に當つては相成さぬけず結果で修養の持つて来る誠意である。彼はヒーマンズと云ふから要する。評議員は各地區からの教養よりばかりだが女性に於ける上には大さな関心を持つてゐるものとしてはおそらく中根さんの右に出る者は無いだろうと確信致すものです。斯くどころに彼は彼は非常な甘いさうだ。彼もあの中根さんださう云ふ人だほど直率的にさう感ぜる。青年會に對する抱負を女性に關しては？と問はる。女性に對してはあらゆる命令に出席してほしい。そして個人の人格をみかくべきである。やはり個人として思慮見があるものであるから出席しても決して女だからと自分を抑下してはいけない。憲法改正後女性の立場はすつと有利になり且つ向上したけれども男子は女子に對して必らずしも全解理解があるとは云へない。そして又評議員中に一人の女子も出席してほしいと云ふ事は本當に機敏な物だ。私は痛にしろいので女子に甘いと思ひはつてゐるだろう。と其時彼に語り直直とこを指示してゐる。勿論一人ださうです。から特に強くとゝの事だ。彼は斯くの石も無い草花を愛する事の出来る人間である。マカで中根さんも迎えるであらう。要するべき人は如何

ない。それらはあつてから個人が有るの活動に委せらるべきであつて、青年會の修養には適しない。修養の方面は、衛生並びに体育の修養から居る人々の修養はもとより、更に進んで職業上の技能と知識の修養も必要だし、家又國市の公民としての政治的修養も必要だし、従つて職業生活の可なり化、青年會が実行して行くのは決して容易なことでは無い。しかし、青年會の目的を只政治修養だけにすると考へて、社会教育の問題を全然考慮に入れないとすれば青年會の一つの機能を全然失却したものであつて遺憾つてゐることは云うまでも無い。意欲の向上、進歩のめまはり、決定に起る起るありと漸次衰へてしまふであらう。

修養と云ふよりかざせば重荷になる。青年會は特別の同志の集団でなく、青年の誰もが入つてゐるべき団体なのだから、むしろ集しあつて向上してゆく方法を探し、探るべきであらう。その方が効果的である。語り合う興味はやかた討論の興味に比し、批判性を養ふことになるのだ。大體にかいて、みんなかぶるあわしうな修養が青年會にはふくめられない。さう云う意味から、青年會の中核的修養は、修養即娛樂、娛樂即修養と云ふ案にあつてほしい。健全な娛樂、楽しい修養である。娛樂の問題を考へるにして

も、その娯楽が獲物の狩をかけたけいけいという
もの、出来るなら何んらの方面において快
立つべき娯楽であつて頂きたい。又快立つよう
取り扱つてほしいものである。

雑論二十数回

栗谷 民平

湖南の虎が青年も澤山であつた野土に於ける同
族間の争は甚である。何ぞ？ 虎も虎だ。いや虎
ではない。その理由が二つある。名も虎に見えて
一途もなまぬといふ左衛門尉と対峙、さうぞ、
いや虎はやらぬいんだ酒とタバコは全くだめだ
之れが彼の横顔でもあるらしい。それでよいのか
も知れない、二十貫の巨体をもつて大虎にならぬ
こは手にあひない、自家用のトヨベツ等ではとう
てい程へんいから少くとも三匹のトラワックか
必要となる？

二番目になれとめ、イナグリ類がそれである。
虎七世を仰はさずいかつて？、クダラ、痛みしめ
た健康な虎を向せ出してこめゆみで力を入れた
てゐるのも教らしい。かの三遊亭歌笑さんこんど
笑ひ方は発見出来たか？た然だ、いや別に后い林檎
を奮奮やちもの、ない處から現ると是意と良意
を得た文化の豹は様である。

ところで副会長の獅子のかけ地地は、さうたんと
直入に來らぬとはこまるな！重席ですよ、とに
く掛け地地なんていせんぢやない、栗にしろく
の深意ですな。後、獅子舞に取れまかせ、栗に
アトラクさした型、凡夫台端の君とはすい分、ヘリ
下つたものである。では謝てお好落を以つてお
へらおまじかど謝け、狸獅子争がなくてこまる
要安まつかねで事の着然に時局の如く望むと
獅子から出た就らしい。栗は父ちゃん型でもあ
さう云ひは立派な衆人回りになるや加案もし
いとさふ。ちよつと厭しめありせんか？、う！
もう一人はね、いらく同業型とは云ひ大分割
したものだ。あの巨体でもち鹿鹿旺盛な獅子の
持ちなから、その熱烈の吐口やいすこと地現に
るか大丈夫、未現と鑑賞にたけた容顔は何めだ
かまじもなく古臭い術技の種々しい興をめぐ
の演習にある。そして此れ流儀さした彼の
角は和合を以て青年運動に熱中さす、け外に
し平和の旗を高く打ち掲げるであらう。

(地蔵 子座 栗谷 民平)

十

下よ、どうも港はのぼせてね、之れ程でのぼせ上
るではない、云つてもよい事を云はない事で事だ
「越左のイデオロギ」に對峙する健全な理想をイカ
グリ、を以て激左する理にも見えますよ、云つても
健康な理想はオルバクじやないですか？、さう
な、然れども其は出てはこつちかかぬわない、いや
の辺で野郎様にまかせますよ、栗に健闘は同答だ。
栗大を中退しつづらば百位青年に立ち返つたのも
和を操る者の見方かこうである。野郎衆
は因循同然自然界ともよく同化無難にまで入らしめ
る和合精神の出産地であるといふ。する、こんど
新しい野郎衆の豹がゆるだらうや？、いやちつとも
あとなしくない、魂えきすることだ、云つて彼の存在
を知る、数回に渡つて與へられた、云々と出版の自由
はそれまで健康に押さつていられた、彼の口角も
解放したからたまらぬ、自然な青年青年が大会、
と約二十数回、當年二七才と云ふから一七才に一月ア
、大会とのさんでいたとしても相違台は七才の時の
若さになる。それでは已は栗大を最でござる
と白紙するから不都合である。趣味は何ですかと聞く
方が野郎、治手でよい、あの時節でよいと云ふ者
家である港の上に幾さべつた、けで手は手にとく
彼の香風景だやせ、さへからず、初と加舞、其の

我が文設より

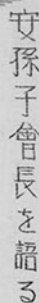
松崎

友情

青色の衣がカバンに
空想と理想と
友情と
一羽にのめ込んでみ
たのだが
再び青色のカバンを
開いてみた時
空想と理想は消え失せて
友情だけか
哀れそうに流れていた

汽車

青島汽車の中で
荷物を車の中
で知れぬ箱で眠る人
然るまでゆく、どうう
眠るのガラスに消えては
うかか
青島小さい家々
をリリしく笑ひ、さうさ
フエイヤリ、の國
バラ色の空に青い鳥かど
その人はせせり知らず
眠つてゐる
たゞ目をつぶつてゐるだけだ
らうか
柔かい夕日が肩をでらす
眠るの甲に
景色は長々と長く、
――十一――



中央
小
名
川
生

平生初めて平賀町の會長（旧姓橋山）は、徳中晩
十四回卒（大正十三年）といへば、勿論明治年間
に生れた人で、同期生では旧神谷村長（神谷市部
氏）や大河原登賢院（大河原一郎氏）平第三中興
校長（夏沼源氏）その他に平賀用組合専務の諸君等
一郎氏）等々居る。ところ書くところであらうだ
うな本や夕蓮中（オクト御氣殿）と同年代に、青年
長でもあるまいに……といふ懸念が能る事も至極
尤である。然し乍ら一度逢つて顔見して見ると、
うしてもオヤダは悪か、アニキとさへも呼べる
式けり者さといふ明かさなど持つてゐる。それ故に
單の若い連中からは愚鈍「マ・ヤン」の呼名で親し
まれてゐる。尤もこの呼名は町町でも共通してゐる

會長は二男二女の父親であるが、家庭にあつては夫に愛嬌ややさしさ愛を注ぎ、故にババでもある。尤もあのミナ美しき奥さんとは情熱が激しく、愛が溢れるので、その當分のロマンチックさ度い事は大分あるが、サシサブリがあるとイケメセんの、で、道長美君の御想像に任せよう。―― 別に一介教師でいらした譯でもありませんよ。

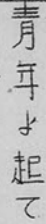
又叔は某外デリケト一面を有し、永産 田舎
君侯、王侯何んでもござぬといふ情、特に近頃
盤詰とバチンコとに耽溺からぬものがあるらしい
初でも先づ母の日に、夕衆を一箇に召持ちし
いたマ、ヤチ様さん産大受持たせて迷惑とかけ
てしまつたのも、贅論の居せる輩と云々……彼は太
分発奮して居た様だから、笑さんの圧力加果外産
かつたものと思はれる。バチンコは喪葬驚く程の
名手で、有月二十様の一入どやないとかや、と
娘王様持つてないと思ふ出来はないといふ程の御家
財、王侯 hands に斜に構へてグツと眠る、指を二ニ
本入れてお茶をバチンク、その王様承に決まらな
いに次の王が入つてゐる。ハネをバチンク、次の王
ハチンク、戦慄等に聞さし以上お膳かな手摘きだ。

一十四

する所を見るに、素外さちらの方が本條條の如く知れ
 はいか、會長の都合は、万年鬼子とでも云い度い
 所ではある。總中時折——紅燈の吳少年(會長ニシ
 面だつたが存?)——は、野球場の花魁技手で、大介
 丹君を流したとの事だが、如何にせん小泉君が求
 創経國のチー子(ババ)時折では、今にして舊の興振
 を知る由もない。若中半農は國教に奉獻、水手兼
 道(野球場)に永く勤めた上で、某隊の明後さんに迄
 られたと云ふ。その水炊時折には、野球場の主時で、四
 番打者としては、遠藤に益みなさリーイングヒターと
 して打撃を奮ひ、當時の日立樂作と共に京城樂が北
 國東(市)を対戦でその水準を供つた程の水炊費全時
 代を熱した人、だから華舞隊に属する限り、その體
 足といふ程度といひ寸此の辺では右に出る人を見出
 し得ない程のオリライで居ある。現在チウアの監督
 で、計画的に後進指導にあたつてゐるか、意にでも好
 られる(春に田町の方では……)人の益と云ふに彼
 單の面刺を深くおて呉れる世当好さと、更に頗る果
 理因い笑も見逃さない事である。その次に、會員
 諸兄弟の中もとちもつて、月下米人を想つとめる者
 合も多くなる事と思ふが、春に親の米者しなない部
 等といふトラブルかゝるに時等は、御遊戯しに御

ナリ、と告げて、すうすうと鼻をすすり、全く無言で減り玉を入つてゐる。露に二つか三つを玉入れ、壁の裏に逃げ廻つてゐる。壁と壁との外はない。頭で裏壁に會合してゐる注輪であるが、散漫の會合と雖も、その會合は決して蒸着したもので、會合の直後正に會合といつた處、事に隨んで動せず、正確な判断と思ふなる実行とは會合には全くつづのハマリ、感得たのも命と思はせられる。因に好して時局を見る人、俗者で、物部族に當り、愛憎を告として、彼等の氣を感得としてゐるからこの會合ある限り、運命のチムワックは完璧に近い現状である。無口で一面ホーツとしてゐる愛(愛憎)で、長て相でも知つてゐると求めているから愛憎たり、グである事に間違いない。この頃の呼吸は全く野郎の氣管といふ其端と大差ないカンで感得しているものと思はれる。然つて一度ピンクになる、愛のフアイトか火と燃えて、時大なる実力加減を解くものも又間違いない事だ、それである。大いには死して然る可きである。

かく窮むるると矢張り彼の正格は、前朝半期を入れた野郎やら生虫だ。スボーツマンとして、フアールイの動物であると思はれる。思はれない。



史部
由
良

國破れぬ 國破れぬ

敗戦のふたへさる汚痕を留め
あゝ我が愛する祖国破れぬ
ひたすら祖国の興隆を念いつゝ
元凶として数百年の衆多の天皇は
大恥として路傍を掃されしまつた。
神の裁かれしは余りにも残酷すぎる
運命にしては余りにも高嶺な代償ではな
らうか？

亂れぬ我、阿魯比映の巷
 飢餓漸く迫りて、慈善地に詣ち
 あり。我か受する祖国危し。
 ヤミとイノリの終極寧ろ
 虚構とエロと、暴力との正巴
 戟我國民の奮然歩む時待たぬ
 刑庭の道ではあるにしても
 迴避の近道は無いものであらうや？
 國を救へ！ 國を救へ！！
 我と富士とに背きぬし。
 我と希望とを取戻し。
 あゝ我か受する祖国救へ。
 我、我れ去りけしたものの、
 嘗ては世界の一等國として
 八旗に破散した大和男の子



草野生

飯野八幡神社を過つて行くとき平市の上水道貯水池がある。この貯水池と相對する位置に遊路に沿つて青木氏の柱庭がある。八幡小路の帯の石條の本々に圍さぬてよい環境である。彼はこゝから生象久保町の青木灣油礦造元へ通ひ、毎日熱心に働き傍らオート三輪車をこはして商用に奔走している。

市運發足まで西部地區代表の一員として骨身指す
奮斗したことは偉大なる功績と云はねばならぬ
そして市運が發足するや西部地區の幹職員に選出さ
れたこと日教の過去に歴代よりみて誠に度々に稀とな
い次第である

彼は長身面長で何時も洋装頭會等には颯爽たる容姿で現はれる。

即ち指目の立つたズボン、趣味豊かなネクタイ、等人格の一篇が何はれ軒議員中の好男子である。

評議員合に於ては、被控持の信念に基き一般に氣付かぬ方面についても鋭き質問の矢をことし、或は兎解の相違ではげしい討論せしむ場合も屡々見受けらる。然レ一度熟決せしむるや全面的に協力し責任を以て承認する姿はよき長所であり、又彼の勇突でもある。彼は八幡小社の會長であり、市連青の評議員更に縣

(四) 東洋の君に國たる事実に
一体何の変わりがあるだろうか!
青年よ起て!! 青年よ起て!!

青年團を要せずんば國亡む
國又青年を要せずんば國破ぶと
然り／＼青年に非ずして
誰かこの日本を建て直し得るや
汝の持つ貴きと特權とも自覺して
若さ力と情熱とを結集しつゝ
祖國再建の建教歌高らかに
あゝり代か奏する青年よ起て！！

吾が文集より

新書

返らぬ日、
廻り出
なつつかしや
さましぢうなぞを
さましぢうのタペ
とリへだす
若き女
かなしき歌の奴々

(イ) 夢の女
阿良の髪の色は
水色の如く今宵又
雲の中から湧き上つた
ける胸の揺るぎなくこ
ゆめゆめか又してこみ
さつと醒れしはかしくも
執り着るこそは知した

生くる日、
歩み
ほかに遠き路ぞ
一歩一歩の然れに耐へたら
自分への道へ
さかしの道を歩いて
抜りずも

人間の大変
どんな親しい人でも
同様にふると
腹が見え違ひて
美しい皮膚をも傷ける

接吻
おゝ我が愛せる人は
全身の血を動かし
全身の骨を動かす

ふるふる鹿は君を抱き
眼は君きにもえ離はうるほ
狂氣のゆく逢ふ
嘆息されるゆくはかる

通青の評議員（平市より男三名女一名）を努めている

追求されて、
 いても又万丈の氣を吐くものと期待するものである
 一面趣味として、端西を専ら好じていると云いてゐる
 この端西こそ人間情懷に大なる影響をもたしめている
 と思ふ。感服より羨みあひの呼吸により、忍耐刀も潤滑力
 も表はれるのである

し、反面自己及爲して人生街道を霧進するならば前途
益々洋々たるものである。

造又前進するであらうが、市連も前進又前進するよう願いたい。

希くは君と血縁と青年の交遊を日々に増すことを
 せると共に青年會の發展に盡力せんことを

青木氏の獨斷を極く上陸し資料の不足を動し筆を廻く。

中央地區青年會

尊野田郎平

松ヶ丘行く人もなし五月雨るる

初孫や嫁の手柄や釧

或る友人と迷信

オキニ日銀青年會



三

十年一昔と云ふからもう一昔も前の頃のことであつた。私の友人に人となつて居た。彼は元來自我心も無く物事の理屈を究めることに興味を持ち、そしてその興味を衝かないと気がすまない厄介な癖の持ち主であつた。従つて判り切れない問題に逢着した時の彼の苦悶は想像に余りあるものであつた。或る時その彼に重大な問題が起り相成に來た事がある。

X X X X X

人一倍負けぬ氣の青春の意氣に燃えた彼は或る事案をしようとしたが、迷信家の彼の母は折衝師を反對するからと云つて彼の事業を阻止せよとせよといふ彼の結婚問題にしても、當時望遠鏡神旺盛な時で虎虎なぞ駄物青年のすること、固執扱いされた時代でもあつたので根柢が悪いの方面が悪いの、年廻りか駄目だのと迷信家の母が大反對だつた。驚し彼にしてみれば青春の希望をかけた事業も消滅する憂も事案に反對されたので持前の自我心も承知しない。

迷信の美態は、根柢は何んであるかと非常な不満とその研究にシヤムニ込込んだ。

る様子をかくする

X X X X X

彼とは終戦以来五六年も會はなかつた。Aとあつたら早速得意になつて帝服事件や朝鮮動亂等々の笑話や個人的生活の裏面を挙げて迷信の醜態を一掃する事だつた。

X X X X X

十年の星霜は青年Aをしてどれ程人間的に円熟させた事だらう。一度會つてみたい氣がする。

X X X X X

迷信を現代の智的百有年達は一笑するでせうか。迷信は社會心理學的に考察するとそれは幾個人の社會的現象であり、迷信はある限りこれに範圍にのみ過ぎない。その社會には通用しない。判断の錯誤であると思ふ。

迷信を同じうする周囲の人々との間には何等の対立もないのみか、互に相助けあつてゐるように見える場合すらある。この社會の外の人々との間には同様の矛盾対立がある。それは戦後復興した新興宗教團體、新興宗教、南光寺、世界メソヂ教、愛友會、等に於ける信者の行動がそれと表付けてゐる。或は戰時中國民のほとんど絶てて持つていた迷信の愚念の如きもの意味で新興宗教であるとも云へると思ふ。

外國の迷信はどうでせうか。外國にも日本と同じ様

として彼は一つの結論を得たのである。

現在の科學常識(數學物理化學正算などの)から美学的に證明されないものはすべて迷信として棄置されなければならぬ。

彼は會ふ人毎に迷信撲滅論を講義して居た。當時の私は彼の持論を全面的に否定する程迷信を信じたわけではなかつたが、彼の環境では、それこそ當然として遂行しても、社會的経験の浅い彼は事業にも失敗したてあろうし、恋愛問題にしても固執的な社會慣習に負けて不幸な結果になつた事だらうと思つた。

當時は彼と會ふ度毎に彼から、天文層に關する迷信、十干十二支の迷信、或は九星判斷方面に關する迷信、亦は呪術的現象の美態、ト占、天地五行並に及み、鬼門、兩子、男女合性、厄疾、家相、等々の迷信を理學的に説明されると興味深く聴いたものだ。あれから十年後魔術事件の犯人は當時、東京の有名な陰陽方術家達の曰く、犯人は東京近郊にあり、曰く、三月以内に逮捕さる、等々だつたが一年以上も経過し、北海道にて平澤犯人が逮捕された。亦今度の朝鮮動亂にしても昭和二十五年末には終了するとか或は昭和二十六年の三月頃には第三國の調停があり解決するとか、占師の言だつたが、未だに朝鮮動亂が紛糾してゐる事だとも考へるとどうした事が迷信である事を事実か證明してゐる。

に迷信はあります。然しそれは單なる迷信である様です。それにこだわらず見ると意にかいさね處に迷信に對しユーモアを感じますか。日本の社會生活や個人的生活を始と結びつく處に迷信の愚念が生ずるのだと思ふ。民族的生活の明きの相違とも云へませう。

我々は人生への影響する處に於て何なり深刻なものがある。封建的な生活慣習及何等科學根據のない迷信を打破して、物事を理學的に判斷し出来るだけ合理的な生活をして行きたいと。

十年前の友人Aを想ひながらこんな事を考へた。



我が人生

松崎生

世は幾り人は羨まれど一筋に
我が行く道は風波なる道
看みて奇蹟みて驚うたれ
ゆるみたる己か恥に
若き日若き想ひにくるもの
素直に生きたと今又は何ふ
いた／＼しく、いらた給ふ吾が人は
秋風よりも冷たく淋し



吾つれづれに想ふ

まき 松崎 四郎

自由な平和な楽しい日本を建設するには、即ち若い世代の青年男女が互に仲よく手とり肩を組んで、愉しくとも楽しい生活をして、若しくとも明るく社会を歩く。たゞくさい足取りで歩いてゆく暇はないと思ふ。これは當然の事であるが、此のデモクラシーの常態が履き違ひている様に思ふ。ヤミ市場やダンスホールにどくろを巻いて社会遊の勉強、又怠惰な青年が健全なる社会を築いて紅燈の巷まのし歩いて放蕩無類の徒を執取るのも日本人特有の公共心即ちパブリックマインドの念しい性格とバランスのとれない習性、然らねる所ではあるまいか。今はダンスなどに溺れている時代ではない。講和條約を目前にする現代はもつと眼を世界の大勢に開いて、もつと健康的な、もつと精神的な、もつと建設的にたくましい若々しい希望と努力とを傾注して新しき生き甲斐のある、そして任み心地よき社会と生活と建設するために團結し、協力して歩むわけならばならぬ。我々ではないだらうか。社会的觀念と公共的關心の欠けた人間より講義された社会は善い如何に憲法や選挙法、憲法法院と民主制には改正しよう、決して住み心地よき楽しい、明るく、ものではなない。

秋神高原に鈴蘭を訪ねて

東部 由良

前巻

人里を歩一歩と離れて行く時は

一種のスリルで此はアホな

不安と楽しさをも兼ね持つ

途中の果樹園で小憩の後

台座に包まれた山路をひたひたに

望みルアを望み心で埋め合せて

途中の秋世の新道

スポン／＼と抜いては

柔い空の元を吸り／＼

由らひの一歩生えた防火線に出る

四時 突如然たり我を待す

眼前に展開されたスタイルの木さ

高原だ！あゝ日暮す秋神だ

可憐な香り高き秋蘭の姿を

滿ち如林に迂迴しつゝ、ヒュッヒュッ

見るからに食糧の小倉ではあるか

(二十)

吾々は身造の現実に冷静に正視して、そして世界の文明國の在り方に廣く眼を射いて現実に吾々の心奥面、物事の考へ方と生活の態度を更けてゆくのである。

文明國の人々即ち老幼男女は食事を簡はす教養に拘らず文化とは生活の雰囲気であると思つてゐる。彼等は唯心に驚く思ふのではなくて日常生活の中に文化的要素を攝取してそれを消化して文化的に生きているのであらう。

即ち日本の文化人や知識階級の多くは、自分の胸の中にだけ欧米文化を取り入れた平等で、頭から下の身体が全く非文化的で低く貧しい生活に甘じてゐる。有様である。日本民主化とは日本に住み心地よき社会を造り上げる事であると思ふ。それには吾々青年が先づ第一に生活の改善と社会の進歩にあらゆる関心と熱意を集中して、明るい楽しい社会の雰囲気を造る事に努力を盡す事であると思ふ。故に吾々は衣食住の具道を文化的に淨化し、整頓して健康的な生活を立てる。それが文化であり、文化人の生活であり、文明國人と對等に交際して恥ぢない。一人前のデモクラシー國民の資質だと思ふ。斯く思ふ時生活の向上、即ち文化の向上は吾々青年の双肩にある事を痛感するのである。

コン／＼と湧き出る清水の群り

夏の花に冬は雪に包まれ

その上我々の徳を一身に集めて

ヒュッヒュッかたはれまじく落られた事か

火を入れた、水の出るくする

台所でコト／＼ナイフの音は

晩のお菓子の器と器の音は

米をこく、鍋をゆける

思ひ上る湯氣の中から

暖の虫のようにもかきまらぬ

わいしこつは飯の香りがする

今夜の泊るテントを覆り

那處を木を切り集めておたら

マホー 本盛か辿り着いた

水は清い、中は焚火で煮いた

二十数分待つて合せてゆき

毎水の森でカレイライスは名取を打つ

半魚の飯をさう一鉢とハリヤる

寝る哉、野帳に八時半

満腹をかゝへて、ヒュッヒュッ外へ出る

九

高原の夜だ！ 高原の月だ！
 赤い雲に映みて快云より方なし
 中天の満月は歌宴に聞され
 下界を望めんと外や必死の努力
 見よ！ 連山の彼方に
 忽然満月出でし又ハットライト
 赤い山を大きくふんわり照えて
 小さな谷間に響く一語きに
 松も大波を来り切る船の操に
 ぐんぐん迫り来る雲中
 我か足下に押し寄す
 仰げば重畳の乱雲は
 十重二十重に乱月を遮み
 山雲一過して又も月影消ゆ
 早朝郵公にて覆破るる
 くわんてんてん
 今しも近く止りまじり郵公は
 尾を力一杯に振り上下に振つて
 美声を運くへ痛き送らんとするか？
 快いそよ風と響はれて
 深山驚かケキヨンと本道すと
 時鳥か血を流す



松崎 生

戦争といふ大きな衝動を受けて吾等青年の精神は震つて来た。戦後の虚脱状態からは逃がれて来たか吾等青年は吾等國民の自由がどの方向に自己を確立してゆくかについての明確なるものがない。我々である。日本は勿論、何れも青年は勿論、何れもである。而して現在の日本は、戦後、戦前と異なり、下位の時期に何つてゐるものである。斯くの如き状態を與へたものはいふまでもなく、戦後の事実であつた。一つは新憲法を重んじてある。新しいものを打ち立てるにしろ、戦前は吾等國民であり、青年である。この事実を否定する事も変更する事も出来ない。この現実の上にのみ新しい建設がなされる。この現実を覆ふ時、一切の善悪不可知のものとなる。その再建の素地が吾等青年であると思ふ。吾等日本人は歴史を持ち、従つて現実の地盤を踏つてゐる者である。この地盤は過去に於て形成され、現在にまで持ち越されてゐる。斯くの如く歴史的制約のものにある地盤の上に立つて吾等は再建せねばならない。そこに再建の困難もある。又再建が単なる地盤的なる理念だけで進行せしめ得ない現実性があると認む。

(土)

スイと飛ひ上つた山雲を目で追へば
 おもひ余せ高原の雲散の朝だ！
 斯かる朝雲を散らし追ひ散らし
 空々の雄姿、厳然たり野原
 その左、一柱旭光を浴びて
 衆数の旗幟、照り返りて輝然
 来た朝雲上らぬ故方
 雲上屹然たり、雲高の連峯
 雲に首を廻らせば、朝の曙に
 白雲、幾々の美しき白山
 思はず、雲とついで出るマッホー
 吾人の歌書と、歌書の絶叫だ
 清い草原を、見渡せば、果々
 陰雨に集まる一隊、二隊の我が友
 陽はぐん／＼、空に日不晴
 青空の下、陰雨の音りか
 時折風に送られ、快い、
 一柱にや、心算やら花をマッホー
 軽い、ルックと別れの重い心で
 一時、ヒュッテと出立する
 振りかへり、ハイハイリ
 高原よ、ヒュッテよ、郵公よ、松崎より

(生)

改に吾等青年が祖国再建の基本的要因といはれるのである。
 敗戦後、基本的な人種が高唱され、教育の充実が主張されるのは當然の事実である。個人、自らを高くする事が要請されねばならぬと思ふ。それに單に政治とか経済とかいふ場合に於いてのみでなく、人間そのものとしての個人が高く成る事が一切の善の礎であると思ふ。
 個人の高尚に二つの要件が重要とするであろう。その第一は個人自らの努力であり、その第二は社会環境の整備である。現今の日本に於て、第二の社会環境の整備は單なる法律の規定以外には困難な事であらう。従つて個人自らの高尚に於いても、それだけ困難が伴ふけれども不可能ではない。その一つが讀書である。讀書は廣い意味での學問である。學問の追求とは單に知識の獲得である。それでは吾等は多少根本的な事物を悟得し、自らの意識を鍛錬する事により、自己の創造的衝動を養つてゆく事である。
 今の日本の問題は外からの考へ方で處理されてゐる。操であるか、それではやはり内面的な努力でなければならぬ。そして吾等青年たちの中に明確な日本に對する認識が出来る時に始めて、新日本再建の黎明が始まる。

事であらう。今の再建の方式は地方の理想又は方式の植物に過ぎない。明確なる文化國家を建設するに於ては吾々青年が中正で根本的建設を遂行してからであると思ふ。その意味に於て讀書の任務は重且つ大であるといはねばなるまい。文藝者のもも諸君である。終戦後大家のものでは荷風、瀧一郎等が處方い、漱石等が余り過ぎ出ていないやうである。戰爭中は自由に書けなかつた作者といふ以外に理由がないうである。左翼派中に櫻痴の關入つていた之もリズ主義者のそれと同じである。現代の文學より右翼的なるものに、歌石、歌外、露伴、森田、等の著作がある。而して更にヨーロッパの古典文學イブセン、ストリンドベリの北歐文學、ドイツ文學、英文學、モウパッサン、ローランの法文學、要するに個人の人々が多く讀み、吾々が物にして、その眼識を高くし、而して新日本建設の基盤を築かうてはな



我が家の五蘭金會

龍

阿 正 道

五蘭金會の美意は孝を返へ恩に報ることであり

有は直に種々の飲食物を調へて自ら飲食道に巧む手づから母に食物を與へました。母の口に食物を入れようとする食物はたちまち炎々たる唇を化して食することではせんでした。母の飢渴を救ふことの出来なかつた尊方は泣き叫んでかへつて來た。この事を尊母に告げて棒の力で母の舌を噛み殺していたと云ふといふ願つたのでした。

尊母はこの時

次の母は、生前の養育態度によつて、この執念一途の苦業を担いだのであるから、彼一人の力では如何ともすることが出来ぬよ。彼の孝順の尹天地を動かすに違ひ、天神地祇も本如何ともする事ではなぬ。然し年にも七月十五日は僧自慰の日とて佛子たち三ヶ月の修行を終つて自分の罪過を告白して懺悔がけられる日であるからこの頃から百善を積まねばならぬ。その功徳力によつて無量無数の苦楚から免れることが出来るであらう。この教へられしので、尊母は大功德主となつて、救國の情を養ひたし、たところ、果して深淵の母を救ふことが出来たといふのでした。

これが今日の我が家の五蘭金會の起源といひ出して居ります。

丘大寺 磐城山 定教寺首座 阿 正 道

すので、祖先を大切にする心から出た畏敬美俗でありす。世に亡き人々を慰むといふことは人間の最も美しい心の現れでありまして、祖の動物には全く現れなない心の働きであります。

生きて父母に孝行を盡すべきは申すまでもないことでありす。死んだからといって全く忘れまいと云ふことは人間の忍びないところでありす。さればとて石に両面は磨かれず、で死んだ人に對しては孝行をしようにも方法がありません。この亡き人を慰み慰めてその恩を忘れないようにすると云ふのが五蘭金會の用意で生時の孝行を死後にまで延長してその教徳の心も微塵せしめる所以の道であるのであります。

起 源

茲に、お金に申しますのはこの五蘭金會を略して申しますので、先祖の苦を救うために金に食物を盡つて供養すると云ふ意義であります。

神代經傳が金蘭園の五蘭金會に記された時に十六弟子の一人で目録尊者が始めて六神通を得得いたしました。時に孝親深い目録尊者は亡くなつた父母を尊養して、背を背けて下ごつた御恩に報じようといひまして、遺腹を以て、あらゆる世界を御覽になりす。その母は氣の世にあつて氣と魂とをこのために御尊は骨と皮ばかりになつて非常に苦しんで居らぬ有様を現しましたので



五口が文集より

東 井 由 成

龍 虎 に 寄 す

(一) 陽まに雲がかりる車馬に
巨大なる龍虎を擁して
臥雲の靈虎がのたうつて居る
その公野には前集はす
敵の鋭い爪牙にかけられた生身か
痛々しい格闘の果実を物徳つてゐる
引で裂かれた黄金色の外皮から
のたうつ皮肉に噴き出される鮮血に
反對した夕日が美しい、一瞬を迎へた

(二) 陽口すつかり落ちて暗黒か
この世の一切のものを押し包んだ
橋の端に唯獨へて居る龍虎は
夜露の光で意氣を収束した
龍は一体魁梧いてゐるのだらうか!!
えッ、どうにもなつてしまへ!!
神も怖もあつて居るものか!!
反唇と白眼と、龍虎と白蛇との魔眼が
既知した顔の千を瀾流となつて過るを思ひだ

「止せよ、子供がやめるさいし、さっさと入つて、さつと出てくりやア、別に何でもないぢやアないや、こめんなさい、ゆかき、ぶつて——實はあたし、あれ、あれは……」

この社會の二十の女としてのまぢ子の衣類、物類に、あつらしくも羞恥心を萌發させてあるやうではあるか、かくまで我を教つたまぢ子の心かお本にはよく解りすぎるほど解つてきた、何時ものまぢ子なら、小娘の襟にはしやきながらタクシーに連れられ、すでに二三度近所の旅館に露出した事かあつたが、今晩は物思いに耽つておるやうなひつに、なぐ車中沈黙のうちにこの旅館についたのであつた、恐ろくまぢ子は別の男と何處かで會ふ事になつておたのであらう、と知るや先程一箱に飲んだビールのほろよい氣分を、彼は蒼白の顔又と化し、動物的な征服欲よりも、人間的な嫉妬を感じた。

だがお本にしては、人前がある、女中か膝下の端つこで、この式はさうなつたやうな服で、おまもつておる、それに男の足得も手傳つてくる。

「えい、お下い、いい加減にしておけよ、バカにするのも程なあらア、貴様おたい百モノに巻のいままでの氣持が解るか、解れ、解つてしまえ、……」と舌ふや否や、彼女の両頬を無邪気に四五へんたいてし

せして、どうんと数分間を過ぎ付て、突ッ散すやうに行きかかると、その時、夜更かちよこちよこお本の傍へ走り掛つて、

「ぬえ、い、すめ、あそこ、あたし、よくお着して、出来たうすに本所名へ御要用しておはしますから、と、さるで持金の女達も及ばぬ取り返し方で、お本の心を取りもどし、一方、まぢ子の得意あつた立場にも恰好を付けてみせようと思ひ入れた。

お本はアンとして、この女中の茶屋で風呂場へ行つた、レカレ引返して又中へ、遂にまぢ子とすだめのかして、こゝへ運出してくるやうな事はない、お本にしても十餘年前の出来事か、心のしづまるにつけて、まぢ子とさるなほど腹中になつておる何か反動的に面白く可笑しく思ひ出され、意識するものである、まぢ子の胸の、お引きつけられておるお本は、解れと解れつたものの、ペラッパによりか、つておる姿をあれこれと頭を降へ降いでもなかつた。

三十分ほど経つてやう、お本は火照つた顔の汗を拭ひ下り百合の間へ戻つてみると、先刻の女中と、ちやぶ台の上にはビールの瓶が片附けもせずに取残こされ、まぢ子の姿は見えなかつた、視察の對象を失つた彼は、お本が拍子抜けの様子で春の半分の夜空に今日一日の行狀がくつきりと画かぬておるのを凝視した、(未完)

丁巳丁小説

青春最悪の日

紫

茂

栗



「あら、危ないぞ、大寺ハンドルのいせな兄さん、戸をかけたら、平さんおどろへて道をよけた、氣づいて見ると左木の奥中を歩いておる。

「おん、おまつてなア、長次郎、実は平さん毎月青年會の會合で新報社に来、文化部長に押付けられた機関誌への投稿が氣になつて腹中であるへていたのでつた。

「本宿に困つたぞ、こりやレ又々晩をこきねいてしやつた。

「先頃より皆様に御願ひであるのですか、充実された青年會の機関誌の創刊号として發刊致しますには原稿が充分でございせん、文化部長と致しましては非常な困つて居るのであります、先日聞きまして文化部長の結果役員と評議員の皆様に御願ひしたい事かございませう、唯今より指名致しますかその方々同志を組合せざるから組合つた割合の人のプロフィールのグラフアップでも申しさすお懇合程度でも結構ですから一ツ指名された方々は確實に次回の評議員會まで書いてきて戴きたいのです。

「神谷地區から評議員として出ておる平さん事、中

お平吉君御願ひしますと依頼されて書く事になつたのか役員中唯一人の女中である副会長の永野美津子女士であつた。

「困つたア永野さんと云はれても極は一丁も交際した事もないし評議員會で顔合せする程度なれだからア、

「貴女も最近平吉君引受て居たもの、まつたく困つてしまつておるのだ。

「街の中央にある市校前で會合が開かれ、市役所から平吉君の歌まで約四キロ程もある平吉君の前では元の進みでシベリヤから引揚ていないので、今の所家まである農家に引き出しておる希望は平凡なサラリマシな希望してゐるのか家のためと百枚仕事にけんめい存のた、純朴な二十五才に於ける農村青年である、頼付いた標に腕時計を廻るとサンマタイムの七時半である、キ、と何時車のブレーキの音かしたと思つと平吉君の肩をぽんとた、かれた、見るとお本君である、このお本君仲々青年運動に熱心で青年會の事とすると目の色を變いて顔色を起る、熱心すぎて家の仕事に抱ける事がある程で親父にちよいちよい小言を言ひ出している平吉君とは云ひ多る竹馬の友だ、

「どうした平さん何ぞあへてゐるんだい、

「お本君自轉車に乗つたさう平吉君の顔のどきどきな様にして居るのかけた。

「男は本意を言ふんぞ、おん名つて文化部長のつよりによつて鑑厚んかに指名しやがつた。いう／＼本音をはいてしまつた平吉君のハッ、密りか文化部長にまで乗んで行つた。」

「何んだ、おい／＼よくよする所、大の男が何んだ、だらしきぬいぞ、何んでも無いぢやないか。」

「さうでも無いよ、吾人は有難迷惑だよ。」

「うぬしいくせに、何んだつて、おい。」

平吉も黙くなつた。

私かこの句を知つたのは秋も深し頃信濃路の旅
せした時である。我輩中だつたので誰か昭和十八
年と思ふ當時横浜に務めて居つてゐる、同郷の友人の
経路にさして引合を共にしたのであり、
上野から居越線で高崎、藤井澤と眺め秋の紅葉の見
事さした時だつたのを憶れる程で有松信濃道分小治と
約五時間の旅程だつた。其の夜は友人宅に小泊し
初めの寺町蕎麦屋に名數さうして次の日は早く拍栗へ向つ
た議員か運ずる拍栗の名に月知の孫は、又つた
しでさき悉く、轉出する新ひろきかぬれた町だ。其
の音信場所としては近距離の立並ひ太根の旅館にゆ
つたに止めるのである。参勤交際の諸大名が本
陣として一夜の夜を取つたのも此の辺りの道う
致事でもなければ分親光あるものだからと友人
か云う。岩波峠と云はれる妙高山のその裾野に
阿田四と云はれる野茂湖がある。
長野縣有数の觀光地である、眼も驚すると黒坂
山の巨峯かしのしからる様子を眺にはつてゐる。飯前

平子「何、お前がら考へたか、何んでも良いから書
け」と云つても書けず、それで、少しは調子であ
る赤野女史をだめ、觀察評定する必要ありだよ、と
うだい、今日でも赤野女史の務め歸りを待つて送り
乍ら姑しでもして見たら、さうなら時間も取らせな
いし、迷惑にもなつたでせう、一氣に赤本男名
義なるものも提示してくだ、平吉思ひつくり
、さ、ん万事出来るもんか、俺か駄目だよ、才一女と
話しすると眼の中が冷たくなる程に氣がするんだよ
俺は、平吉君がくつてお本名に言った
、しつかりしろよ、さん万事で何にでも書けるんだ、駄

七才の折の句ときき実母を失はつた淋しさは此の
であつた。その本の下で書いたものであろう。 飄飄の後には
在や自然か唯一の友だつたのである。 いたづらに
云はれる。 文才が讀み取れぬまゝ、おちた羽を振
残つてゐる。 一生の生涯はその命まゝと知る。 運命を
はめる境遇であつた。 異丹弟との争も必然の嘆き
なかに終り、返さぬ旅の生涯も、その終りな
運命の運命にまつたのかも知れない。 人間の愛憎
怨のたがひが排句と反として生長したのもうなかつた。
緩な氣がする。 被か御する句はほとんど牛生流の
短の探だ。 人生を斜めに、飄生運反逆境としての
とある。 中み乍もやはり人間性の下

新しき太陽
。一條の路
遊履を勉めてゐる路
運命を暗示している路
季節を流ち早く知つてゐる路
永劫に沈黙を穿つてゐる路
路・路は人生の綱目ではないだらうか

昭和二十八年七月十日発行、平書年・創刊号

合資会社
田中板金 請負店
田中英男
平市新川町18 TEL 567

保証
責任
農林産品
野菜類
平市四町目 TEL 157
菅野屋商店

荒物 長 陶器
松崎商店
平市新川町
電一七二

味噌、醤油
製造販売
青木商店
平市久保町 TEL 1167

御中元用 奉仕品 豊富取揃
小野榮呉服店
平市四丁目・電515

タンスと家具一軒
伊藤家具店
平市新川町 TEL 464
30%

御贈答品には
江
入江セモノ店
平市五丁目
電話五八二番

茶は
御贈答の最適品
平市四丁目
根本園
電456